

藤原正彦著「国家の品格」新潮新書、新潮社 2005年11月20日刊を読む

「国家の品格」

はじめに - 品格ある国家の指標 -

品格ある国家の特徴にはどんなものがあるでしょうか。情緒と形を身につける、というのでは抽象的で目に見えにくい。これらを身につけるとどんな国家となるか、具体像がないと、どちらへ向かって進めばよいか分かりません。

品格ある国家の指標は4つあります。

1. 独立不羈

(1) 1番目は、国家の独立不羈^{ふ き}です。自らの意志に従って行動のできる独立国ということです。現代日本は、ほとんどアメリカの植民地状態にあり、まったくこの条件を満たしていません。世界に誇る日本の美しい情緒や形に触れることで、戦後失われた祖国への誇りと自信を取り戻すことができます。誇りと自信がないと、繁栄しているならこの植民地であろうと構わないではないか、守ってくれる国があるのなら、その国の言いなりになってもよいではないか、となります。欧州各国と比べて、極端に低い食糧自給率を高めることも、独立国として大切です。日本が40%弱であるのに比べ、イギリスでも75%、ドイツは90%、フランスなどは農産物の大輸出国です。

(2) 独立不羈には、自分の国は自分で守るという覚悟も必要です。注意すべきは、確固たる防衛力は、隣国への侵略力にも転じかねないということです。だからこそ一層、美しい情緒と形が必要なのです。

2. 高い道徳

(1) 2番目は高い道徳です。日本人の道徳の高さについては、戦国の終わりから安土桃山時代にかけて我が国を訪れた宣教師をはじめとする人々が、異口同音に驚きの声を上げました。これは明治になっても同じでした。明治初年に来日し、大森貝塚を発見したアメリカの生物学者モースは、日本人の優雅と温厚に感銘し、「なぜ日本人が我々を南蛮夷狄^{いてき}と呼び来ったかが、段々判って来る」と書きました。モースはさらにこう書きます。「日本に数ヶ月も滞在していると、どんな外国人でも、自分の国では道徳的教訓として重荷となっている善徳や品性を、日本人が生まれながらに持っていることに気づく。最も貧しい人々でさえ持っている」と。

(2) 昭和の初め頃までに日本に長期滞在した外国人の多くは、同様のことを記しています。逆に、

日本からアメリカへ行ったキリスト者の内村鑑三や新渡戸稲造は、故国の徳の高さに打たれました。徳の高さを測る尺度はありませんが、過去千年間の各国を何らかの方法で比較することができたら、おそらく間違いで日本人がトップと思われます。この、日本人の DNA に染みついているかの如き徳心が、戦後少しずつ傷つけられ、最近では市場経済によりはびこった金銭至上主義に、徹底的に痛めつけられています。野卑な諸外国に合わせず、高い徳という国柄を保つこと、そのために情緒と形を取り戻すことです。日本人が、この特性により世界に範を垂れることは、人類への貢献なのです。

3 . 美しい田園

- (1)第 3 は美しい田園です。美しい田園が保たれているということは、金銭至上主義に冒されていない、美しい情緒がその国に存在する証拠です。イギリスを訪れた人は誰でも田園の美しさに打たれます。それを見ただけで、イギリス人が金銭至上主義に染まっていないことが分かります。品格の高さを感じられます。実は彼等もかつてはそれに染まっていた。1 世紀前に卒業してしまったのです。金銭が必ずしも幸せをもたらさないことを見てしまったのです。
- (2)美しい田園が保たれている、ということは、農民が泣いていない、ということでもあります。経済的にもっともしわ寄せを受けやすい農民にまで心が配られていて、農民が安心して働いている証拠です。経済原理だけでなく、祖国愛や惻隱の情が生きていることでもあります。
- (3)田園が乱れている、というのは恥ずべき姿です。かつて我が国の田園美は、維新の頃に訪れたほぼすべての欧米人に「こんな美しい国で一生過ごしたい」「日本の田園はすべて公園である」「日本の道は夢のよう」などと褒めそやされたものでした。その田園は、市場原理により、この数十年ほどですっかり荒らされてしまいました。

4 . 天才の輩出

- (1)第 4 は、学問、文化、芸術などで天才が輩出していることです。先に申しましたように、天才が輩出するためには、役に立たないものや精神性を尊ぶ土壌、美の存在、跪く心などが必要です。市場原理主義は、これらすべてをずたずたにします。アメリカという反例があるではないか、と言う人もいるかと思いますが、違います。アメリカはその富と世界一の研究条件に魅せられて流入する、世界の天才秀才たちに支えられているのです。何らかの理由で流入が止まったら、それまでです。
- (2)日本は天才を生む土壌を着実に失いつつあります。美の源泉でもある田園は荒れ、小学校から大学まで、役に立つことばかりを追い求める風潮に汚染されています。跪くのは金銭の前ばかりです。金銭を低く見るという武士道から来る形は、すっかり忘れられました。田園が荒れれば、

日本の至宝とも言えるもののあわれや美的感受性などの情緒も危殆に瀕します。

おわりに - 世界を救うのは日本人 -

(1)日本は、金銭至上主義を何とも思わない野卑な国々とは、一線を画す必要があります。国家の品格をひたすら守ることで、経済的斜陽が一世紀ほど続こうと、孤高を保つべきと思います。たかが経済なのです。

(2)大正末期から昭和の初めにかけて駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クローデルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和18年に、パリでこう言いました。

「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

(3)日本人一人一人が美しい情緒と形を身につけ、品格ある国家を保つことは、日本人として生まれた真の意味であり、人類への責務と思うのです。ここ4世紀間ほど世界を支配した欧米の教義は、ようやく破綻を見せ始めました。世界は途方に暮れています。時間はかかりますが、この世界を本格的に救えるのは、日本人しかいないと私は思うのです。

[コメント]

大ベストセラー、藤原正彦先生の「国家の品格」は、日本人が忘れかけていることを教えてくださる名著。日本の素晴らしさ、日本のよさを素直な心で学び、10年後、100年後の日本のかたちを考えたい。

- 2010年6月12日 林明夫記 -